

令和7年度東京都広報コンクール 総評 映像部門

柴田委員

映像が身近で重要なメディアとなる中で、都内の自治体の皆様が広報ツールとして映像を多用して頂いていることを非常に嬉しく感じました。映像が身近なメディアになったからこそ、企画力や技術力が問われます。そして何よりも大切なのが映像を使って「何を伝えるのか、伝えたいのか」です。

今年度の映像部門は、SNSでの拡散を意識したショート動画から、地域の魅力を深掘りするドキュメンタリータッチのものまで、表現の幅が大きく見応えのある作品ばかりでした。特に高く評価されたのは、単なる「お知らせ」ではなく、「地域の課題解決」や「住民のシビックプライド」に焦点を当てた作品です。視聴者の感情に訴えかけるストーリー構成が多く見られ、自治体広報の新たなステージを感じる作品も多くありました。

一方で、画質や編集技術は向上しているものの、音声の聞き取りやすさやテロップの視認性など、アクセシビリティの面でさらなる配慮が期待される作品もありました。

今回ですが自主制作で高いクオリティのドキュメンタリーを制作された羽村市「木工家五十嵐誠さん」を高く評価させていただきました。地域で活動するクリエイターの情熱と、羽村市という土地が持つ穏やかな空気感が見事に調和した良質なドキュメンタリー番組でした。派手な演出に頼らず、被写体である五十嵐さんの「手」や「眼差し」を丁寧に追うことで、視聴者に制作者の哲学を静かに、かつ深く浸透させる構成となっており、自治体広報番組が担うべき「地域の宝（人）の再発見」を高い次元で体現していると思います。被写体への深いリスペクトに基づいた構成は、視聴者に「羽村に生きる人の豊かさ」を再発見させ、地域の文化的価値を一段高めることに成功したのではないかでしょうか。

武蔵野市「栄養バランス」はSNSでの拡散を意識した新しい時代の映像コンテンツとして高く評価させていただきました。自治体特有の硬さを排除し、YouTubeのメインユーザー層に馴染みのあるVTuberフォーマットを採用したことは、視聴完了率（レテンション）を高める戦略として非常に理に適っています。「七転さらさ」というキャラクターが、専門家（栄養士等）と市民の「中立ち」として機能しており、情報の伝達や拡散がスムーズに行われるのではないかと思います。

今後も「誰に何を伝えたいか」という原点を大切にしながら、各自治体の個性が光る映像制作を続けていただきたいと思います。

高木委員

昨年に続き審査員を務めさせていただきありがとうございました。昨年初めて拝見させていただき、この活動、映像を通して、各区市町村の広報皆さまが、伝えたいこと、伝えたいことを大切にされていることをとても嬉しく思います。

地域の方々へ伝えるツールではなく、外部の方々に伝えるツールとして映像を効果的に使われている区市町村さまがより増えたように思いました。その中でも、自主制作を試行錯誤工夫されている企画がいくつもあり、映像がみなさまにとっても、より身近になっていくことがわかりました。表現幅、ジャンルが多岐に渡っておりましたので、今年も評価が難しい部分もありましたが、押し付けにならず、見る側を考えながら作られているか。

ここを基準として評価をさせていただきました。

今回最優秀賞に選出させていただいた、羽村市 「木工家 五十嵐誠さん」と一席の武蔵野市 「栄養バランス」は本当に甲乙つけ難い状況でした。ドキュメンタリー番組とSNSコンテンツというジャンルの違いもあり、アプローチがだいぶ違うものでしたので、かなり悩んだ結果でした。どちらにも共通していることとしては、クオリティーの高さ、見る人を惹きつける映像構成ということでした。

奨励賞で選出させていただいた、小笠原村 「硫黄島戦没者合同追悼」に関しては、「史実を伝える」という使命を感じる映像でした。毎年戦争を題材にした映像作品はありますが、映像の目的の1つである、「記録を残す」という役目を、しっかり感じられる映像作品でした。

全体を通して、クオリティーが昨年よりも上がっている印象でした。映像作りで大切なことは、先述しますが、押し付けにならず、見る側を考えながら作られているか。ということなのですが、作られてる方々が、楽しく作るというのも、もう一点大切なポイントになると思いますので、楽しみながら、取り組める映像作りを来年も心がけていただければと思います。